

「一本幹のある英語授業の構築のために」

静岡大学教育学部 三浦 孝

1. 英語授業の「幹」とは何か

近年、英語教授法の進歩には目覚ましいものがあり、毎年新しい指導法が開発され、多くのアクティビティー集が報告・出版されている。英語教師はこうした how to 技術の情報の洪水にさらされている。こうした情報には流行の波があり、それが時には「コミュニケーション活動」へ、また時には「基礎基本の徹底」へと、志向を転変しつつ流れている。ともすれば教師は、こうした指導法の流行の波に流され、自らが直面する教育的課題を見失い、断片的な指導技術の追いかけに終始してしまいがちである。指導技術はいわば樹木の枝葉であり、いくら枝葉を蒐集してもそれを有機的に統合する幹が無ければ、「行く先の無い」授業にすぎず、生徒を納得させることはできない。

では、授業の幹とは何か。それは、学習・教育の理論的知識と、目の前の生徒の実態に対する理解とに基づいて、教師が授業目標を立て、目標に到達するための道筋を持つことである。

例えば、大阪府の高校教師・菅 正隆先生(1994)は、底辺の普通科高校で、英語嫌いで学習意欲に乏しい生徒たちの英語授業を、意欲にあふれた学びの場へと劇的に変えた教師である。と、「英語授業は嫌いだけど、外国には興味がいっぱい」という生徒の特質を考慮して、学校に国際公衆電話を引き、生徒が英語で外国の諸施設のインフォメーションカウンターに電話をかけて必要な情報を聞き出すというタスクを与えて生徒の学習動機付けをはかり、見事に成功させたのである。

また、やはり大阪府の中学教師だった太田佐知子先生(1988)は、指導困難校に赴任して、生徒の低学力・低意欲・心の荒れに直面し、「生徒が言いたいことを言えずに腹にたまっている」という状況判断に基づいて、「今日の表現」という活動を授業に盛り込み、生徒の声を挙手で募って毎回1つずつ英語にして与えた。「今日の表現」集はノートの裏表紙に書き溜めさせ、定期試験にも出題した。本当に言いたい事優先であったため、未習の文法事項も含んでいたが、生徒は自分たちの思いが英語になることを喜び、抵抗はなかった。また後に教科書の新出文法事項を導入する際に、既にそれが「今日の表現」に使われていた時などは、導入が楽にできたという。

筆者もかつて指導困難高校で教えたことがあった。そこでは、生徒の最も嫌いな教科が英語であり、ほとんどが就職希望者で「将来英語なんか必要ない」と考えていた。授業中生徒は私語、居眠り、徘徊、他所事にふけり、授業成立は困難であった。3年間既存の授業スタイルで格闘したあげく、筆者は思い切って全くちがう授業スタイル(三浦：1991)に転換した。それは授業を生徒にとって最も重要な話題を取り上げて英語で一緒に考える時間にすることであった。「恋愛心理」「音楽」「いじめ」「適職」「旅行プラン」「映画」などの話題で生徒が意見表明できる自作プリントを作って授業を行った。この新方式に生徒は大いに乗ってきて、眼を輝かせて授業に参加し、毎回の授業は生徒達の知っていることや意見の活発な交換の場となった。

これらの実践に共通するのは、第一に教師が生徒の実態 抱える問題や関心事項・学習ニーズを深く把握しようとしていたことである。先述の「目の前の生徒の緻密な観察・洞察」がこれである。指導法の流行や小手先のテクニック依存に流されると、それらが授業の主人公となり、目の前の生徒が主人公でなくなってしまう。第二の共通点は、低学力・授業妨害・学習動機の欠

『The Promising Age 棚橋克彌先生静岡大学退職記念論文集』静大教育学部英語研究会会誌平成17年4月発行

如などの問題を前にして、教師が「こんな生徒は教える価値がない」などと投げるのではなく、「この生徒たちが学習する可能性はどこにあるか」を学習理論に照らして考察したことである。菅先生の依拠した理論は、「人は学んだことを実際に適用して物事を操作してみたい」という Ausubel(1968)の学習動機理論に通じる。太田先生の理論は、「人間は自己の思いを安全に、恐怖なしに表現し、他者に受け入れられることを求める」という Rogers (Rogers in Brown:2000:90-91)の理論に通じる。そして筆者の対応は、「人は誰しも、愛されたい、人から認められたいと思っている」という Maslow (1970)の理論に通じるものであった。教師の無手勝流の頑張りやあきらめで未知の事態は打開できない。目の前の暗い現実の向こうに、生徒のまだ見えない可能性を見るためには、学習理論による展望が必要なのだ。第三に共通するのは、生徒理解と学習理論に基づき、「こうすればこうなるはずだ」という目標と到達するための道筋プランを立て、思い切ってそれを生徒に投げ掛けたことである。「このやり方で、この期間がんばれば、君たちはこういうことができるようになる。一緒にがんばろう」である。こういうリーダーシップが、クラスを変えてゆくのである。授業を貫く「幹」とは、これら3つの要素を言う。

別の言い方をすれば、次の条件が揃った時、授業は確実に成立する：

- (1) その授業の目的が教師と生徒にとって明確に理解されており
- (2) その目的が生徒の学習ニーズと合致しており
- (3) 用いる指導法(教材を含む)が掲げた授業目的と合致している。

このように見てくるとわかるように、授業成立は教師の人気取りのパフォーマンスや、暴力的威圧とは関係ない。もっと地道で緻密な構成要因から成るものである。本稿では、こうした構成要因を(1)英語授業の目的、(2)生徒の学習ニーズ、(3)目的達成のための指導法、の3点から考察したい。

2. 英語学習の目的をどう捉えるか

2.1 外国語学習の目的と、英語教育の目的

何語であれ、外国語を学習する目的は、実目的と教養的目的に大別される。実目的とは、国家間・団体間・個人間の産業・経済・交易・政治・交流上必要なコミュニケーションの手段として、その言語を学習するものである。一方教養的目的としては下記のものが挙げられる(村野井ほか、2003)：

- 1) 国際感覚を育てる：一人ひとりが偏狭なナショナリズムや偏見などから自らを解放し、国際社会の中で世界の人々と共生していくための資質を育てる
- 2) アイデンティティを発達させる：異質な文化や外国人に接することにより、「自分とは何か」「自分の社会の特質とは何か」といった自己意識に目覚めさせる。
- 3) 言語への理解を深める：外国語を知ることによって、母語についてより良く知ようになり、言語そのものへの関心を深める。
- 4) 他文化・自文化を理解する：他文化を理解し、視野を広めるとともに、自文化を客観的・相対的に見ることを養う。
- 5) 知的訓練の手段として：外国語の複雑な言語体系を学習することによって、学習者の論理的思考力を養う。

『The Promising Age 棚橋克彌先生静岡大学退職記念論文集』静大教育学部英語研究会会誌平成17年4月発行

6) 外国文化や文明の輸入：先進国の文化・文明を取り入れるために、その国の言語を学ぶこと。

日本の奈良・平安の頃の漢文学習や、幕末・明治の蘭学や英学がこれにあたる。

以上が外国語教育の主要目的の一覧だが、外国語の中でも英語は今日最も優勢な国際補助言語としての位置にあり、そのために英語教育は他の諸外国語教育とはちがう特殊性を持っている。村野井ほか(2001)によれば、2001年現在、世界の英語使用者は少なくとも16億人にのぼり、その3分の2以上が英語の non-native speaker である。これによって、世界の政治・経済・貿易・技術・学術・通信等の言語が圧倒的に英語で行われる状況が出現し、その状況は増加の一途をたどっている。したがって、英語教育の目的も、これを反映して実目的観がますます肥大している。

2.2 日本の学校の設立理念から見た英語学習の目的論

さて、日本の学校は、どのような目的のために英語教育を行っているのだろうか。今まで挙げてきたような一般的な目的が、日本の学校教育にそのまま当てはまるわけではない。学校英語教育は、あくまでも教育基本法が規定する公教育{初等教育(幼稚園～小学校)、中等教育(中学～高校)、高等教育(大学・大学院)}の一環として、公教育の全体的目標に奉仕するものとして置かれているのである。それでは、公教育の全体的目標とは何か。それは教育基本法1条に次のように規定されている：

教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

ここには、教育があくまでも人格の完成を至上目標として行うべきであり、その時々々の国益に教育を奉仕させるべきではないことが、明確に示されている。日本が長期不況と産業の低迷、国際競争力の低下に苦しんでいる今日においても、教育は第一義的に「生徒の人格の完成」のために行うべきであって、時の政府の都合で行うべきではない。初等・中等教育における各教科は、単にそれが実利に役立つからという理由でなく、生徒の人格の完成に貢献するからこそ、教育課程に組み入れられているはずである。それを尊重することが、一見回り道に見えても、実は本当に国を豊かにする近道なのである。

それでは、英語教育で人格の陶冶をはかるとは、具体的にどういうことなのか。これについて、中等学校教育の場合を、図1を使って説明したい。

図1の最も外側の実線の円が、教育基本法1条に規定された中等教育の目標、つまり「人格の完成」である。そのすぐ内側の破線の円が、その構成要素である「全人的コミュニケーション能力の育成」を表す。これは、「国語」「芸術」「体育」「外国語」など、およそ表現にかかわる教科を含んでいる。その内側の一点鎖線の円が、中等学校の教科としての「英語」の目標を表している。

教科としての「英語」の目標は、4つの下部目標から構成されている。それらは、

目標1. 「コミュニケーション能力育成」の目標

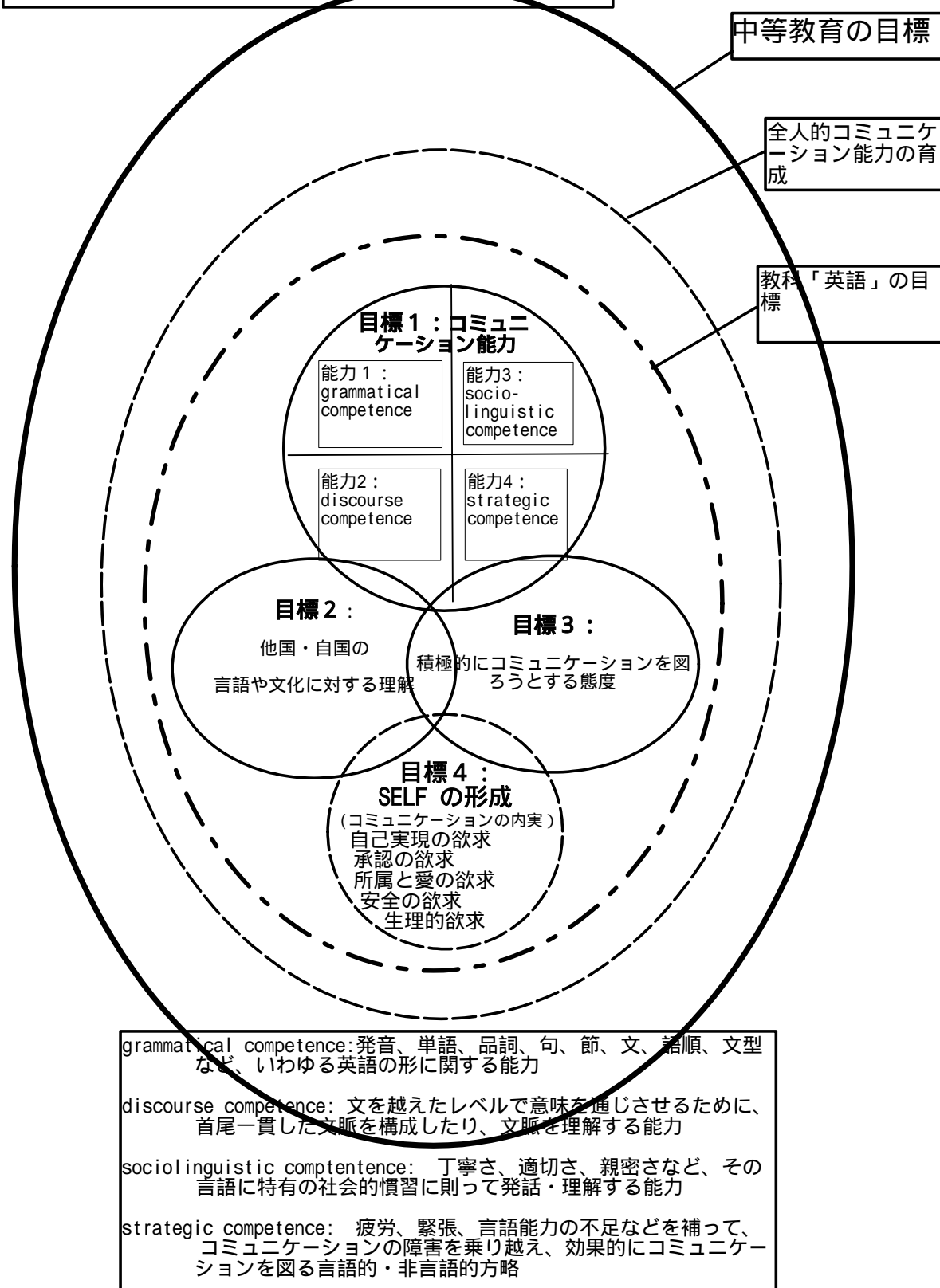
目標2. 「自国や他国の言語や文化に対する理解を養う」目標

目標 3 . 「積極的にコミュニケーションをはかろうとする態度育成」の目標

目標 4 . 「SELF(自己)を形成する」目標

から成ると考えられる。

図1：（初等・）中等教育における教科「英語」の位置



『The Promising Age 棚橋克彌先生静岡大学退職記念論文集』静大教育学部英語研究会会誌平成17年4月発行

そのうち目標1～目標3は、現行（平成10年文部省告示）とその1世代前（平成元年文部省告示）の学習指導要領外国語編に盛られている3大目標である。これらの目標の意義については学習指導要領解説編を参照されたい。4つ目に挙げた「SELF(自己)を形成する」目標は、筆者の提案であるので、以下に解説する。

英語教育の目標として、なぜSELF(自己)の形成を挙げるのか。その答のきっかけとして、企業人対象の英語教育機関 Language Institute of Japan の校長のドン・メイビン氏の体験を紹介しよう。メイビン氏はある時、日本の大手製造業のエンジニア10数名の企業内英語研修を頼まれたことがあった。その会社は、近々外国から大規模な製造設備を購入することを予定していた。購入にあたり、新規の製造設備の使用方法を説明するため、購入元からインストラクターが来日して、約1週間ほどかけて日本のエンジニアに特訓をする予定であった。メイビン氏は、そのエンジニアたちが、インストラクターの説明を理解できるように、英語特訓を施すことになったのである。メイビン氏は、何日かをかけて、エンジニアたちに英語のマニュアルの読み方や工業英語などを教え、かなりの自信をもって訓練を終えた。数ヵ月後、偶然そのインストラクターと顔を合わせた氏は、それとなく例のエンジニアたちの英語力について感想を求めた。インストラクターは、メイビン氏が研修を担当したことなど知るよしもなく、率直にこう答えた：

「あのエンジニア達を教えた時は、面食らったよ。どこかで英語の特訓を受けたって聞いたけど、まったく初歩的なことすらわかっていないんだ。」

メイビン氏はびっくりして、それはなぜかと問うてみた。

「研修を始めてみたら、私の話をみんなうなずいて聞いているし、理解できるかと聞けばイエスと答えるので、真に受けていたが、数日後になっていざ機械を操作させてみたら、私の話を全く理解できていなかったことがわかった。おかげで、最初からもう一度教え直さねばならず、予定よりも研修が長引いた。会社としては大変な出費だよ。わからない時に『わからない』と言えるだけの英語力さえ持ち合わせていなかったなんて。」

このことの教訓は何か。新しい言語を使うためには、新しい自己を形成する必要があるということである。大学出のエンジニアたちが、“I don’t understand.”という表現を知らなかったはずはない。にもかかわらずエンジニアたちは、“I don’t understand.”とストップをかける行動がとれなかったのである。日本語とはちがって、英語ではより良く理解するために相手を interrupt することはマナーにかなったことである。そういう英語的自己が育っていなかったのである。

同様の英語的自己の未発達、生徒が教室で英語で簡単な質問をされた時に取るためらい行動によく見られる。例えば平均的英語力の高校1年生に“What is your favorite season?”と質問したとする。質問された生徒は、尋ねた教師の方を向くことも無く、隣の生徒や後ろの生徒とヒソヒソ相談し、あてもなく辞書や教科書をめくって2～3分を浪費する。それからやっと教師に向かい“I don’t know.”とか“Pardon?”とか言うのである。この行動の意味するところは何か？それは、他者依存、自分の決断で物を言うことからの逃避、理解できないということを明白に表明することからの逃避である。もしこの行動を英語圏の学校でとったならば、その学生は“irresponsible”, “cheating”といったマイナス評価を受けるだろう。

英語は、自己を明らかにする言語である。「風邪を引きました」という主体あいまいな表現でなく、“I have a cold.”と主体を表明する言語である。先ほどの例に関して言えば、“What is your favorite season?”という質問にも、「理解できない時は、理解できないと表明して当然」と考え

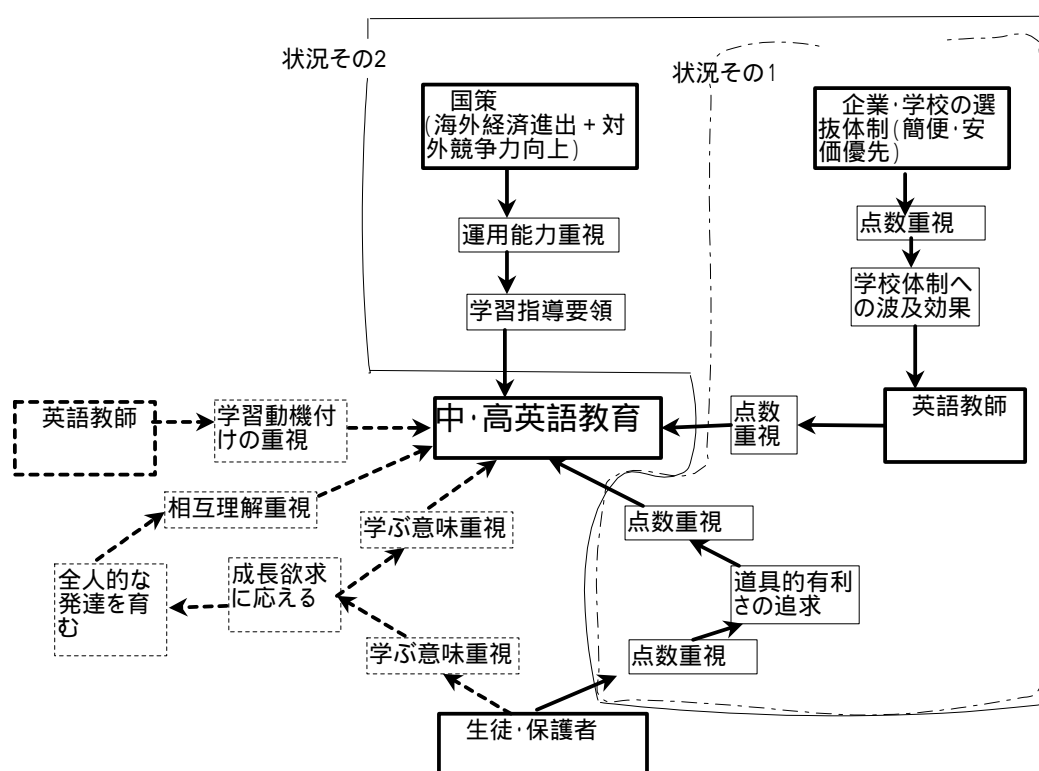
るのが英語的発想である。質問した人をほったらかしにして、2分も3分も他人に依存して返事を引き延ばすことの方が、不適切なのである。

コミュニケーションの中心は「質問する」「意見を述べる」「提案する」「主張する」「正当化する」「反論する」「批判する」などの対人行動である。その行動を取るためには、個人として自分を堂々と主張する自己の形成が必要である。つまり単にオウムのように空疎な言語を発するので無く、語るべき内実を持った自己を育てることが必要である。授業で用いる、安全だが少し勇気の要るコミュニケーション活動での成功体験によって、そうした自己は形成されてゆくのである。ひとつの英語表現を学ぶことは、新しい思考や行動との出会い、自己の思考や行動の振り返り、新しい自己の伸張につながるものでなくてはならない。

2.3 日本の中・高英語教育を動かしている現実的要因

これまでは、学校英語教育をその理念（建て前）から考察してきた。今度はそれを、理念とはちがった本音から考察してみよう。まずは学校英語教育を動かしている、現実の力学的要因を分析してみよう。日本の中・高英語教育を動かしている主な力学的要因は4つあると筆者は考える。これらの4要因がそれぞれに学校英語教育に独自の目的観を付与し、それぞれの目的観は合致したり反発しあったりしている。図2を参照しながら、その力学関係を考察してみよう。

図2. 中・高英語教育を動かしている力学的要因



要因 国策：図2で「国策」と書かれた要因は、「英語が使える日本人の育成」という言葉に代表される、英語教育に関する国家政策である。これが学習指導要領にも色濃く反映されている。日本の海外経済進出と対外的産業競争力向上を推進するための英語運用能力重視が目的であ

る。

要因 企業・学校の選抜体制：企業や官公庁の就職試験、大学等の教育機関の入学試験制度であり、試験の簡便性・安価性優先を特徴としている。本来、応募者の能力は、直接その能力を問う仕事をさせることによって最も良く測定できるはずである。英語運用能力について言えば、4技能を統合した面接式テストで最も良く測定できるはずである。しかし、そのためには膨大な時間や人手、経費がかかるため、やむをえずその代替手段として、多肢選択式の筆記式間接テストを用いている。

陥りやすい誤りは、こうした間接テストを長年行っているうちに、それが本来取るべき測定手段よりも劣る代替手段だという認識が失われ、あたかもそれ自体が正当なテストであるかのように受け入れられてしまうことである。テストは、波及効果を引き起こし、受験生や彼らを教える学校は、目指すテストで高得点を取るように、授業や勉強を方向づけてゆく。妥当性を犠牲にしてコストを優先した試験が生み出すのは、妥当性を犠牲にした試験対策的授業である。選抜体勢が作る英語教育目的観は、「試験で高得点を取るための英語教育」であって、本来の英語力養成は二の次となる。

要因 生徒・保護者：生徒・保護者が英語教育に関して持つニーズは、大きく2極分化している。一つは、上記「企業・学校の選抜体制」に対応する形で、進学・就職試験で高得点を取る力をつけたいという、点数重視のニーズである。もう一つは、英語を話せるようになることを含めて、自分の人生を豊かにするために英語を勉強したいという、学ぶ意味重視のニーズである。このように、生徒・保護者の英語教育目的観は、「点数目的」と「学ぶ意味目的」の2つから成っている。これらは相互補完的に働く可能性はあるが、現状では「点数目的」が優先され「学ぶ意味目的」は後回しになっている。図1で後者を破線で表したのは、その意味である。

英語教師：上記「企業・学校の選抜体制」と「生徒・保護者」の点数重視ニーズが学校でぴったりとかみ合う中で、英語教師は功利的ニーズ充足を至上任務と捉える学校体制にカッチリと組み込まれている。図1の「状況その1」(一点鎖線囲み)はそれを表したものである。この状況のために、英語教師が授業のアプローチやメソッドを自らの信念で選択する裁量範囲は非常に狭くなっている。教師の目的観もまた、「点数目的」と「全人的発達」とに2極分化しており、これらは相互補完的に働く可能性があるが、現状では「点数対策が先決、全人的発達は二の次」となっている。進学校の多くの教師の「生徒の進学希望を叶えてやるのが、授業の第一の使命です」という発言の中に、この状況は典型的に現れている。図1で後者を破線で表したのはそのためである。

「状況その1」・「状況その2」と、軽視されている部分

図1の「状況その1」は、「企業・学校の選抜体制」と「生徒・保護者」の点数重視ニーズがぴったりとかみ合う中で、学校体制がそのニーズ充足を至上任務と捉え、考える余地なくそういう英語教育を強いられる構図であり、10年ほど前までの日本の英語教育の構図であった。しかし1998年に第6回改訂学習指導要領が告示され、2002年に文科省から「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」が発表されるにつれて、この状況が変化した。運用能力重視が英語教育の頂点に置かれ、英語運用能力がTOEIC, TOEFLといった間接テストのスコアと同一視される傾向が一気に強まった。そのために、今や英語教育の構図は、図1の「状況その2」(実線囲み)へと変化しようとしている。

これとは対照的に、研究が遅れているのは、生徒の成長欲求に応える立場での英語教育であり、それは図1に破線で表示した部分である。この部分は、EFL(English as a Foreign Language:英語が普段日常的に使われておらず、外国語として学習されている)状況での生徒の英語学習動機に関わる部分であり、また生徒が英語でコミュニケーションする際のメッセージ内容に関する部分、言い換えれば「語るべき自己を掘り起こす」部分である。これについては更に次項で考察する。

2.3.1 「使える英語力」空回りの危険と、学び・教える意味付けの重要さ

国策の「使える英語力の養成」を至上目的とした英語教育は、しかし、根本的な矛盾の上に立っている。その矛盾とは、中・高の英語学習者の大半が、将来の公私生活両面において英米人と対等にわたりあうようなニーズを予測していないことである。現実には、経済同友会教育委員会が平成11年10月に行った「企業の採用と学校教育に関するアンケート調査」結果によると、「国際コミュニケーション能力」は企業が大卒新入社員に求める能力の中で7位でしかない(回答総数:131社、回答企業社員数合計:約100万人、回答率50.2%)(中央教育審議会:1999)。このような現状を踏まえるとき、「英米人と対等にわたりあえる」英語運用能力育成のための英語教育政策は、英語学習人口の1割未満にしか該当しない教育目標を、他の9割以上にも適用するという無理を犯していることになる。中・高から英語教育を実用一辺倒に傾け、しかも大多数の生徒にとってその実用性の意味が薄いとしたら、そうした英語教育は何の魅力があろうか。ここに、TEFLとしての英語教育が持つパラドックスが存在するのである。

そのパラドックスを乗り越えるために、TEFL状況下にあっては、学習者にとって人間的に意味のある・成長欲求に応える英語教育を行うことによって、彼らの学習意欲を高める必要がある。こうすることが結果として英語運用能力をより効果的に高めることにつながるのである。生徒は、たとえ自分が将来英語と全く関係の無い人生を送ると想定していても、自分にとって学ぶ意味があると納得すれば授業に積極的に参加するようになり、以って英語力を向上させてゆくのである。もともとかなりの忍耐と努力を伴う外国語学習を、直接必要性を感じない学習者に取り組みさせるために、動機付けの果たす役割は大きい。TOEIC対策多肢選択式テストのドリルのような授業では、とてもそのような動機付けはできないのである。学習動機については、2.4.2で詳しく述べる。

2.4 生徒はどのような英語学習目的を持っているか

2.4.1 アンケート調査からわかること

表1は中学・高校・大学生対象に、「何を目的として英語を学習しているか」についてアンケート調査した結果である。結果で特徴的な点は:

- (1) 試験対策的目的(アとウ)は高校生までは上位を占めているが、大学生になると下位に落ちる、
- (2) 外国人とのコミュニケーション的目的(イ)は、中学生～大学生まで一貫して上位を占める、
- (3) 友好理解的目的(エとオ)も、一貫して上位を占める、
- (4) 国策的目的(サ)はあまり支持されていない、

などの点である。ここでも中高生が点数重視的目的と友好理解的目的という、2極文化した目的意識を持っていることが確認できる。

表1. 学校の英語授業の目的は何か、についてのアンケート調査結果

| 目的 (下記項目ごとに、非常に重要と考えるなら3、重要と考えるなら2、少し重要と考えるなら1、重要でないと考えたら0を付けさせた。右列の数字は、そのポイント合計を人数で割ったもの) | 中学生回答 (平成15年調査、静岡県・愛知県の中学生361人) | 高校生回答 (平成15年調査、静岡県・愛知県・石川県の高校生580名) | 大学生回答 (平成15年調査、静岡県の大学・短大生372名) |
|---|------------------------------------|--|-----------------------------------|
| ア)入試や就職試験に受かる英語力を養う | 2.50 | 2.22 | 1.64 |
| イ)英語を使って外国人と話が通じる力を養う | 2.29 | 2.30 | 2.25 |
| ウ)英語検定などで高得点を取る英語力を養う | 2.09 | 1.66 | 1.42 |
| エ)日本語でも英語でも、自分と人が互いにわかりあう力を養う | 2.02 | 1.99 | 1.81 |
| オ)外国の文化を知り、文化のちがう人々とも仲良くする素養を養う | 1.99 | 1.96 | 1.86 |
| カ)外国語の勉強の仕方がわかるようになる | 1.73 | 1.61 | 1.49 |
| キ)地球環境を良くするなど、言葉のちがう世界中の人々と協力して、世界をより良くする | 1.72 | 1.62 | 1.58 |
| ク)アメリカやイギリスなど、英語圏の文化を知る | 1.62 | 1.54 | 1.55 |
| ケ)英語の勉強を通じて頭脳のトレーニングをする | 1.61 | 1.42 | 1.35 |
| コ)英語学習を通じて、日本語をもっとよく理解する | 1.50 | 1.41 | 1.17 |
| サ)世界の中で強い日本経済を作る力を育てる | 1.16 | 1.11 | 1.29 |

* 網掛け部分が、中学・高校・大学生それぞれの英語学習目的の上位3位である。

2.4.2 学習心理学から見た生徒の学習動機

<その1: Maslow に学ぶ>

今度は、心理学から生徒の学習動機を考察してみよう。厳密に言えば本稿が論じているのは、英語の学習目的であって、学習動機ではない。しかし、この2つは学習成立のための主要な条件という点で共通である。なぜなら、動機も目的意識も、学習者を学習に駆り立てる主要な原動力となる点で、同じだからである。そればかりか、この2者は互いに相乗的関係を為している。日本のようなEFL状況下では、生徒の学習動機は必ずしも明確ではありえない。たとえ学習者が、明確な英語学習目的を持たなくとも、強い学習動機があれば英語学習は立派に成立する。なんのために英語を学んでいるかわからないが、上手にできると先生が誉めてくれるから頑張る、というのがその例である。先ほどのアンケート調査でも、「外国人と話が通じるため」の英語学習目的観は強かったが、現実にははたして何割の生徒が近い将来、そういう必要に恵まれるだろうか。現状の日本では、「英語で仕事をする」「英語圏に留学する」「独力で海外旅行をする」といった実目的は、ほとんどの中高生にとってリアルな目的とはなりえない。このように生徒の学習目的がはっきりしない状況では、心理学の識見に立って、目の前の生徒の学習動機を理論的に推測し、学習動機に働きかける授業設計が有効に働く。

Brown (2000)は学習動機を説明する理論として、Maslow (1954)の欲求階層説 Ausubel (1968)の精神的欲求説を挙げており、この2つの理論は学習動機の解明に非常に役立つ。

Maslow は、人間の基本的欲求を、表2にあるような5つの階層で表わした。これら5つの欲求は、誰に強制されずとも、すべての人間に自然に湧きあがってくる欲求であり、止めようとしても止められないパワフルなエネルギーを持つものである。この欲求を学習へと導くことができれば、学習は大いに促進される。

(1) 生理的欲求：食欲、排泄欲、睡眠欲、性欲といった、生物的次元の欲求である。これが学習へと結びついた例としては、人類祖先の農耕技術の発達が挙げられる。人類は、飢えることなく常時食料を確保したいという生理的欲求から、農耕文明を発達させたのである。学校授業との関連では、アメリカ人教授から聞いた、学習環境の悪い地区の小学校に赴任した数学教師の話が興味深い。彼女は生徒の学習意欲の無さに手を焼いていたが、ある時休憩時間中に生徒がサイコロ賭博に熱中している姿を見て、それを使った数学の授業を思いついた。彼女は、サイコロ賭博で賭け人が胴元に勝つ確立を、数学的に出す方法を生徒に教えたのである。彼女の試みは大ヒットし、授業中全く関心を示さなかった生徒たちが、身を乗り出すようにして授業に集中した。そして、一旦火のついた数学への興味は、それ以後衰退することはないという。この場合は、賭けで勝ちたいという物欲が、学習動機へと結びついたと言える。

表2 . Maslow (1954)の基本欲求階層説

| |
|---------|
| 自己実現の欲求 |
| 承認の欲求 |
| 所属と愛の欲求 |
| 安全の欲求 |
| 生理的欲求 |

(2) 安全の欲求：身体的・精神的攻撃や危険からの自由、不安や恐怖からの開放の欲求である。この欲求が学習動機につながった最大の例は、医学や軍事の発達である。病気や怪我や死からの開放欲求は、人類の高度な医学・薬学の発達の原動力であった。英語授業との関連で言えば、生徒が安心して発言できるクラス作りが、この欲求充足のために必要である。何か言ったために、あとでクラスメートや教師にそのことで攻撃されるようなクラス状況下では、いくらコミュニケーション活動を設定しても生徒は恐ろしくて参加できない。授業中の安心感と言えば、まず教師みずからが、生徒に恐怖や屈辱を与えていないか、反省しなければならない。よく、「怒る」とことと「叱る」ことを区別せよと言われるように、叱る必要がある場合には、伝えるべき内容を冷静に明確に生徒に説いて聞かせ、決して人格を攻撃したり否定するような言辞を用いてはならない。「だからお前は駄目なんだ」という否定的な叱り方は、人を育てるものではない。「この点を治してごらん、君はもっと魅力的になるよ」という風な、援助的叱り方をされると人は頑張るものである。

生徒間の関係が悪いと、安全の欲求がおびやかされ、学習は停滞する。筆者も、昔高校教師だった頃、ボス的な生徒グループが他の生徒を罵倒するクラスで教えたことがあった。そこで筆者は「この授業では、誰でも安心して発言する権利が有る。他人の迷惑にならないかぎり、この権利を妨害す

ることは許さない」と最初に宣言し、何度も何度もそれを説いて聞かせ、他人の発言を野次などの妨害行為が出るたびに静かに、しかし断固として批判し続けて、半年かかって安心して発言できるクラスになった。

安全の欲求で忘れてならないのは、教科の成績の出来・不出来で人間的価値を否定される恐怖である。学習年齢が進めば進むほど、生徒間の学力差は大きくなる。中学3年生ともなると、今やっている英語授業がほとんど理解できなくなってしまった生徒が、クラスに少なくとも1割はできてしまう。英語教師は、こうした生徒が毎回の英語授業で、「自分は駄目だ」「自分は無能だ」「こんな成績で将来生きてゆけるだろうか」といった自己卑下、無力感、挫折感、不安を増幅させていることを察しなければならない。一般に英語教師は、自分が昔から英語が得意だった人が多く、そのために苦手とする生徒の気持ちがわからない。それゆえついつい「英語ができない奴は21世紀では生きていけないぞ」などという無神経で誤った言い方をしてしまう。こういう時は、自分が最も苦手だった教科の授業を受けている自分を想像してみるとよい。筆者の場合は、中学生の頃体育授業が大嫌いだったので、体育を受けている自分の気持ちになってみる。すると、鉄棒から落ちる恐怖や、体力テストで女子の前をビリで走る屈辱感がイメージできる、それを英語に置き換えてみるのだ。そんな私が、50歳を越えた今では、昔体育で習ったラジオ体操や長距離走、筋力トレーニングのおかげで健康を維持しスキーを楽しんでいるから、体育はありがたいものである。生まれつき足の速い生徒と遅い生徒がいる。努力しなくても運動神経抜群の生徒もいれば、どんなに頑張っても愚鈍な生徒もいる。運命が与えた個人差というものは、確かに存在する。だが長期的に見ればこうした優劣などその後の人生の決定要因のほんの一つにすぎない。長期的に言えば、素質よりも継続的努力の方がはるかに力になる。だから教科指導というものは、生徒が一生かけてその教科を愛好してゆく素地を作ってやればよいのである。

英語の場合も、もともと語学センスのある生徒もいれば、語学音痴の生徒もいる。努力だけではカバーしきれない素質差というものは確かに存在する。中学3年生ともなれば、学力差は歴然と開いてくる。しかし英語授業で「学力」は養うべき力のほんの一部にすぎない。例えば show and tell という活動を考えてみよう。自分にとって意味深い品物を提示しながら、それについて英語でクラスに語る活動である。ある生徒は、内容的アピールで光っていよう。ある生徒は英文の洗練さが見事である。またある生徒は、内容のユニークさが際立っている。そしてある生徒は、トークの面白さで光っている。ある生徒は、用意した絵が素敵である。このように、一人一人の生徒が、どこかで光るものを発揮している、それを教師が気づくことが大切なのだ。教師がそういう多元的価値観で自分たちの価値を認めてくれることを感じた時、生徒は英語が「できる」「できない」に過度にこだわらなくなる。

「できないけど、がんばる」という姿勢がそこで生まれる。安全の欲求はこうして守られる。

(3) 所属と愛の欲求：人は誰しも、「ひとりぼっちになりたくない」「どこかのグループに所属したい」「人から愛されたい」「人を愛したい」と願うものである。毎年4月の新入学やクラス替えの時期には特に、生徒のこうした切実な欲求をつぶさに見ることができる。新しく入ったクラス、見知らぬクラスメート、見知らぬ先生、そんな淋しさ・心細さの中で、生徒たちはおそろおそろ互いに働きかけ、言葉を交わし、一刻も早く友達を作り、クラスに溶け込もうと一生懸命である。

この欲求を英語授業へと導くことは、大変に有効なモチベーションとなりうる。「生徒は、クラスメートともっと良く理解しあい、友好を築きたいと常に欲している。ただし、自己を危険にさらさないという条件付であるが」、このことを頭に入れておけば、生徒が乗ってくるコミュニケーション

活動は、おのずと教師の頭に浮かんでくる。「今日はどうやって、生徒と生徒を出会わせようか」とアイデアを練り、実際に教室で生徒がうれしそうに英語で交流しているのを見ることは、英語教師の大きな喜びである。

(4) 承認の欲求：これは「自分が価値ある存在だと認められたい」、「人から賞賛されたい」「自分で賞賛できる自分でありたい」と欲する欲求のことである。人は、欲する承認を勝ち取るためになら、どのような困難にも耐え、どのような危険をも犯すものなのである。

昔、旅客機のフライトアテンダントから、こんな逸話を聞いたことがある。乗客の中に5歳くらいの男児を連れた客がいた。その男児は最初は狭い機内でじっと静かにしていたが、やがて耐えられなくなり、歩き回ったり叫んだり他の客にいたずらを始めた。両親が静止しようとする大声で泣きわめき、更に機内の厄介者となっていく。困り果てた両親のところへフライトアテンダントがやってきて、「坊や、元気ありそうだから、お姉さんのお手伝いしてくれないかな」と持ちかけた。フライトアテンダントは、坊やに自分と同じエプロンを掛け、カートと一緒に押して、乗客におしぼりや飲み物を配るのを手伝ってもらうようにした。男児は乗客に「お利口さんね」と褒められ注目を浴びて得意になり、にわかに良い子に変身した。これは、マイナスの方向に発露されていた男児のエネルギーを、本人の承認欲求に働きかけて、プラスの方向に転化させた見事な例である。

方向を失っていた承認欲求に正しい方向を与えることによって、承認欲求を学習エネルギーへと転換させた典型的な例が、今から20年ほど前の長野県・篠ノ井旭高校の実践（若林：1996）に見られる。この学校は、全国から高校中退生の転入を初めて受け入れた高校であったが、受け入れた多くの生徒たちは勉強そっちのけで町の暴走族と化してしまった。教師たちはその原因を必死に探求し、その原因が学力不振であることをつきとめた。生徒たちは、小学校5年生頃から落ちこぼれ、それ以後理解できないまま授業を強要されてきたために、強い劣等感と将来不安に押し潰されそうになっており、そこからの逃避として暴走行為を繰り返していたのだ。非行を無くすには学力回復が必要だ、と教師たちは考えた。教師たちは、最も落ちこぼれの深刻な数学と英語で、学力回復に取り組んだ。数学は小学校5年レベルから、英語は中学校1年レベルから、段階別の少人数授業を10段階以上設け、教科を問わず全校の教師がどれかのクラスを担当して、生徒を希望するクラスに入れてやり直し授業を展開した。小5数学（一番下のレベル）の授業は、全員がマスターして小6クラスへ進級してしまえばその時点でたたんでしまう方式である。

小5で分数に落ちこぼれ、自分には能力が無いと思い込んできた生徒たちだったが、この指導の中で分数の足し算・引き算ができるようになると、「先生、俺って馬鹿じゃないんだ！」と自分を見直していった。こうして、「自分もまんざらではない」という達成感・成功体験を積み重ねるにつれて、生徒たちはおのずと暴走行為から遠ざかっていった。自分に自信を持ち、将来に明るい見通しを持ちはじめた彼らには、もう暴走する必要はなくなったのである。

英語という教科は、その得意・不得意によって、生徒の自尊感情や劣等意識を生みやすい教科である。これを解消させる道は、決して「目標を下げて低レベルで満足させる」ことではない。生徒の可能性を信じて、多少高くとも価値ある目標を設定し、それに向かって適切な援助と励ましを与えることである。篠ノ井旭高校の実践のように、個々の生徒の学力の現状を把握し、高いけど頑張れば手が届く到達目標を設けて、それに向かって学習を援助するのである。こうした取り組みによって、「自分には到底無理だと思っていた学習が、自力で達成できた」という達成感が生まれ、「自分もまんざらではない」というプラスの自己評価が生まれ、承認の欲求が満たされてゆくのである。

(5) 自己実現の欲求：自己実現とは、「こうありたい」という理想の自分に向かって努力し、理想の自分に成ることである。人は普通、なりたい自分があるならば、おのずとそれに向けて歩み出したくなるものである。自己実現欲求とは、そうした「なりたい理想の自分」になるために、「その実現に向かって努力したい欲求」である。例えば、将来プロサッカー選手になりたいと思っている子供が、その実現に向けて「トレーニングしたい」「技術的指導を受けたい」「体力作りをしたい」と欲するならば、それが自己実現の欲求である。しかし、同じ夢を持っていても、その実現のために何の準備もしようとしない場合は、自己実現欲求があるとは言わない。

自己実現の欲求は、本人の境遇や素質といったハンディを克服して、ものすごい奇跡を成し遂げてしまうものである。それほど、この欲求は力が強く、学習動機に導けば莫大な力となる。例えばマラソンの有森裕子選手はマラソンにあこがれ、高校に入学してすぐに陸上部入部を願い出たが、その走りを見た顧問から「素質無し」として断られた。再三断られ続けた有森は監督に自分の力をアピールするために猛烈な自主トレーニングを行い、わざと陸上部の横で走って見せることによってついに陸上部入部を勝ち取った。貧農の子に生まれ手に障害を持ちながら伝染病治療の世界的権威となった野口英世、幼少時に父をアル中で失い母が精神錯乱で入院し、ロンドンで路上生活をしながら役者を志しついに世界の喜劇王となったチャールズ・チャップリンなど、世界の偉人にはこういう自己実現タイプが多い。

筆者の知人の息子の A さんも、自己実現欲求で大躍進を遂げた一人である。A さんは中学校に入学してたまたま誘われて入った部活動が、非行少年の溜まり場になっており、その使い走りをやらされて勉強をさぼりがちになり、素行面で教師たちににらまれてしまった。勉強に落ちこぼれたまま中学3年生になり、7月の保護者会で「近隣の高校で合格できるところは有りません」と担任に言い渡されてしまった。英語の成績は、3年生240人中220番であった。困り果てた両親が筆者に相談に来て、筆者は夏休み中彼に英語の補習を施すこととなった。

最初に彼を教えた時、私は彼に将来の夢を聞いた。「飛行機が好きなので、パイロットか航空管制官か航空整備士になりたい」と夢を語った。「じゃあ、その夢を実現するために、先生と一緒にがんばって勉強するんだよ」、筆者はまず言い聞かせた。自己実現欲求を勉強に向けるためである。それから毎日、中学1年の教科書に戻って1パートずつ、内容理解 スラスラ朗読 自分の訳文のみを見て英訳 制限時間内暗誦 制限時間内暗写、のやり方で教科書を完全消化させた。こうして1パートを完全に仕上げてから、次のパートに進む。最初は遅々としていた歩みが、徐々にスムーズになっていく。10日ほどで中学1年を終了し、中学2年は難度が上がっているにもかかわらずそれよりも早く終了し、更に中学3年の7月までの既習範囲を全部終えた。試験でギリを取っていた彼が、30日足らずのうちに、中学3年教科書を何も見ずに正しい発音でスラスラ暗誦できるまでになっていた。

夏休みが明けて9月の実力テストで、A君は240人中80番の成績を取った。10月の中間テストでは、40番台に入った。周囲の大人は彼の進歩に大いにびっくりしたが、最も驚いたのは彼自身だったようだ。「返って来た成績を見た時は、何かの間違いじゃないかと思った!」ともらしていた。あれだけのスピードで暗誦するには、帰ってから相当な努力をしたにちがいない。

英語ができるようになったという自信は、Aくんの生活全体を前向きなものに変え、彼は最初は不可能と言われていた近隣の高校に合格した。高校入学後は目標を航空管制官に絞って勉強し、卒業後は航空自衛隊の幹部候補生となり、何度かの昇格試験を突破してついに念願の航空管制官となった。彼の自己実現欲求は、中学3年までの英語の成績を凌駕して余るほどの大活躍を見せたのである。

<その2：Ausubel に学ぶ>

Ausubel の提唱した人間の精神的欲求 9 項目は、生徒がどのような学習活動を好むかを説明するのに役立つ。総括的に言えば、表 3 に挙げた 9 つの欲求のどれかを適切に満たしていれば、学習活動は成立すると言える。

表 3 . Ausubel の精神的欲求(Ausubel, pp.368-379)

| 欲求一覧 | 日本語訳 |
|--------------------------------|-------------------|
| need for acceptance and praise | 人から受け容れられ賞賛されたい欲求 |
| need for collaboration | 人と一緒に働きたい欲求 |
| need for self-expression | 自分を表現したい欲求 |
| need for ego enhancement | 自己を高めたい欲求 |
| need for exploration | 探求・探検したい欲求 |
| need for manipulation | 習った事柄を操作してみたい欲求 |
| need for activity | 活動したい欲求 |
| need for stimulation | 刺激を求める欲求 |
| need for knowledge | 知識欲 |

それでは、これら 9 つの精神的欲求を満たすような英語学習活動とは、どのようなものだろうか。それをまとめたのが表 4 である。

表 4 . Ausubel の精神的欲求と英語授業

| 欲求一覧 | どのような学習活動がこの欲求を満たすか |
|--------------------------------|---|
| need for acceptance and praise | 安心できる受容的雰囲気の中で、生徒が自分自身や自分の考えを発表し、互いの良さを教えあう活動。 |
| need for collaboration | グループやペアで助け合い協力してタスクを仕上げる活動。 |
| need for self-expression | controlled composition, controlled dialogue, opinion poll, 自由英作文, show and tell, スキット製作, ドラマ化など、英語の形態的出来のみでなく内容的・表現的価値が評価させる活動。 |
| need for ego enhancement | 達成感や成功体験を多く体験させ、「自分もまんざらではない」と実感させる活動。 |
| need for exploration | 「ここはなぜこうなるのか?」「これを表現するにはどういう英語にしたらよいか?」「テキストのこの話題についてもっと知りたい」といった生徒の疑問を積極的に受け入れ、クラス全体にその疑問を投げかけ、生徒に仮説を提案させ、文献や事例で検証してゆく探求型授業運営。 |
| need for manipulation | 習った言語事項を実際に使ってみる活動、実在の人物に手紙を書く等、使用場面が本物に近ければ近いほど効果的であり。 |
| need for activity | 1 時間中じっとして教師の話を聞いている授業ではなく、学習事項を動き |

| | |
|----------------------|--|
| | や対話や練習で確認するプロセスを含んだ授業。 |
| need for stimulation | 端的に言えば「飽きのこない」授業。わかり切ったことの繰り返しを避け、生徒にとって新しい発見や知的好奇心の刺激のある授業。 |
| need for knowledge | 今までできなかったことを、できるようにしてくれる授業。自力では理解できなかった学問を、理解できるようにしてくれる授業。 |

<その 3 : Rogers に学ぶ>

カウンセリングの創設者、カール・ロジャーズは、教育の最終目標が断片的知識や技術の切り売りではなく、生徒の持てる可能性をフルに発揮した状態での、全人的な人間形成であることを主張した。そして、授業を、そうした全人的発達をはかるプロセスと位置づけ、生徒自身の健全な自己理解の形成と、自己を他者へと伝達する活動が授業の中心となるべきことを説いた：

we need to see to it that learners understand themselves and communicate this self to others freely and nondefensively. Classroom activities and materials in language learning should therefore utilize meaningful contexts of genuine communication with persons together engaged in the process of becoming persons. (Rogers in Brown:2000:90-91)

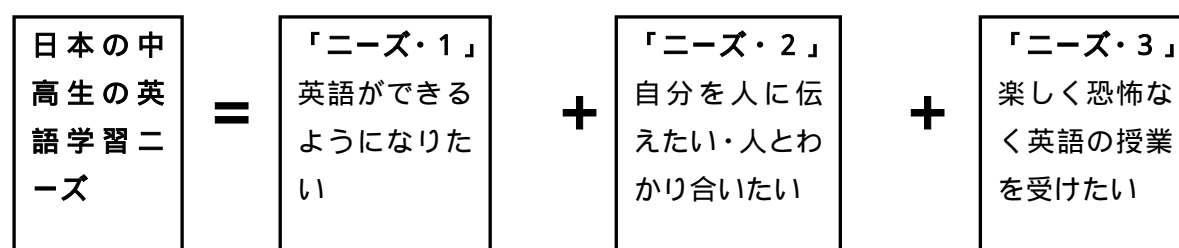
教師は、学習者が自己を理解し、その自己を自由に安心して他者に伝えられるように配慮すべきである。...それゆえ、言葉の授業におけるアクティビティーや教材は、意味ある場面で行わなければならない。それは、ひとかどの人物して育ちゆくプロセスにある者同士の本物のコミュニケーションという、意味ある場面である。(筆者訳)

Rogers の主張を英語教育に適応するならば、英語でどう自己を理解し、その自己をどう他者に伝達してゆくかを磨くことが授業の中心を為す長期目標だと言えよう。すなわち、それが英語授業の幹たりうるものである。

2.4.3 生徒の学習ニーズをまとめると

以上、生徒の英語学習のニーズを、学校英語の置かれた力学的関係、生徒のアンケート、心理学的学習動機から考察してきた。これらを統合して、日本の中高生の英語学習のニーズを図示したのが、図 4 である。

図 4 . 日本の中高生の英語学習のニーズ公式



日本の中高生にとっての理想の授業とは、「英語ができるようになる授業、自分を人に伝え・人とわかり合えるような授業、恐怖の無い楽しい授業」と大きく括ることができる。それでは、どのようにしたらこのニーズに応えられる授業が実現できるのか、指導法を次章で考察する。

3. 生徒のニーズに適切に応える指導とは

3.1 英語ができるようになりたいニーズに応える：

生徒のニーズとは第一に、英語ができるようにしてくれる授業である。先ほどの、航空管制官になったAさんの例のように、これまで出来なかったことが出来るようになるほど自信をつけてくれるものはない。これこそ人生の最大級の喜びなのである。

それでは、英語ができるようにする授業とは、どういう授業なのか、その条件を示したのが図5である。図5では、英語学力を英語コミュニケーション能力と定義し、その下部能力をCanale and Swainに従ってGrammatical, Discourse, Sociolinguistic, Strategic Competencesの4つで想定している。そして、英語学力を基本的に縦軸と横軸の2つの学習要因のベクトル量と捉えている。

縦軸は生徒が英語と接する量、すなわち英語 exposure（ただし意味の理解を伴う exposure に限る）の総量であり、英語インプット・アウトプット・インタラクションから成る。

横軸は生徒の個人要因の合計であり、「知力」と「学習モチベーション」と「学習活動の質と量」から成る。そのうち「知力」は、英語力に大きく影響しているが、あまり人為的に左右できない領域である。「学習モチベーション」は、「2.4.2 学習心理学から見た生徒の学習動機」で考察したとおり大きく学習を左右する。「学習活動の質と量」は、生徒個々人の行っている勉強の仕方の質と量を意味し、具体的には（1）英語授業で学習する事項の理解をどの程度合理的に行っているか、（2）学習した事項を定着するための練習をどの程度効果的に活用しているか、（3）学習した事項からどのように自力で仮説を立て、検証しているか、（4）自分の学習をどのように効果的に管理できているか、の4項目から成る。

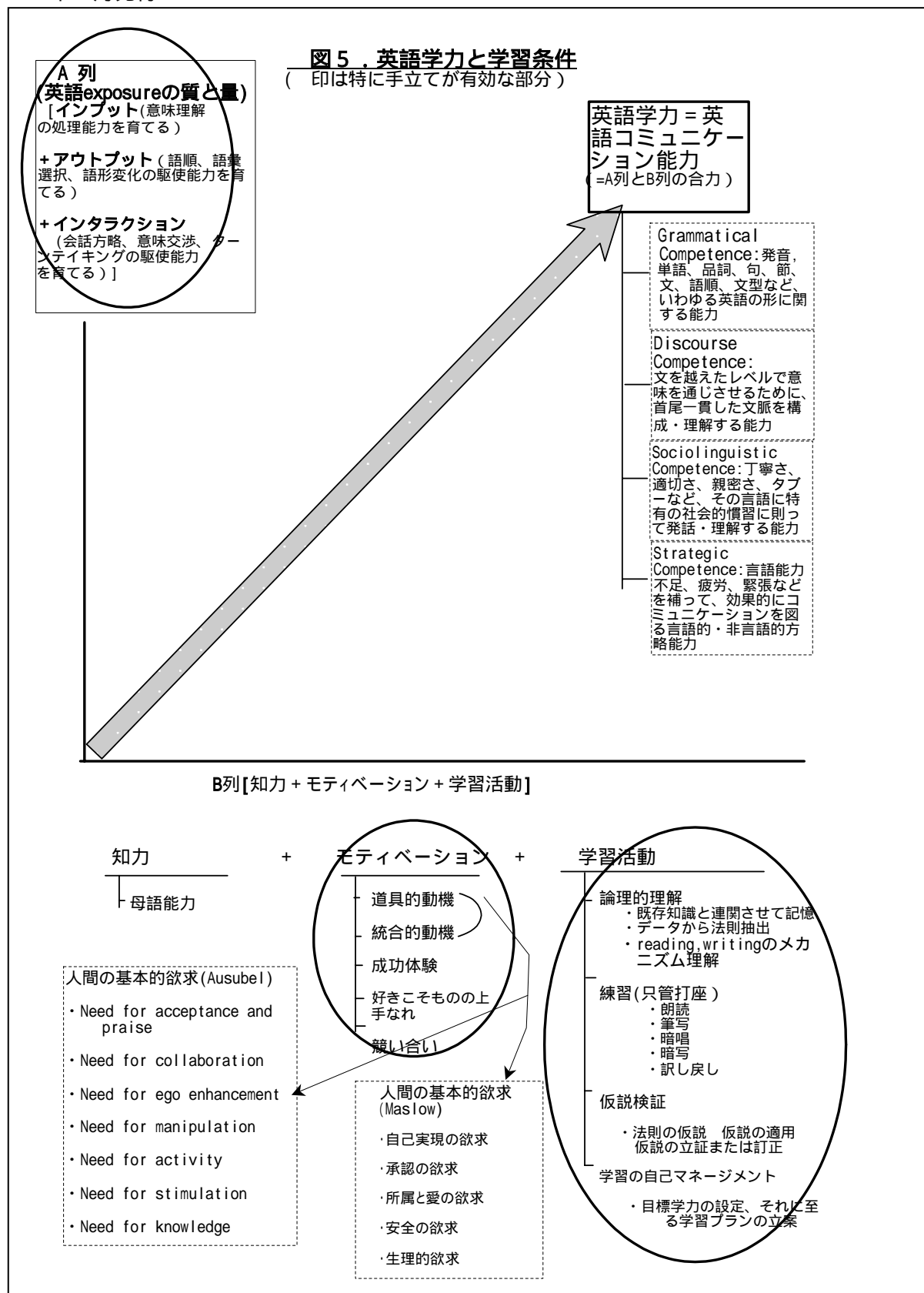
英語学力を向上させるには、図5の学習要因のベクトル量を上げてやればよいのである。そしてそのためには縦軸、横軸の値を増加させればよいことになる。ただしその中には、教師や生徒がコントロールできない要因も含まれており、学力向上のポイントは教師や生徒がコントロールできる要因の向上にかかっている。具体的には、縦軸の「英語 exposure の量と質」、横軸の「英語学習モチベーションの強さ」、「生徒の英語学習活動の質の向上」の3要素が鍵をにぎる。

この3要素をどう伸ばすかが、本稿のテーマである「英語授業を貫く一本の幹をどう構築するか」の答えとなる。そのうち、「英語 exposure の量と質の向上」は昨今の英語教員研修会やセミナーなどで盛んに取り上げられ、指導書も多く出版されているので、ここでは割愛する。次に、「英語学習モチベーションの強さ」は既に前章で取り上げたので、そちらを参照されたい。ここではもう一つの要素である「生徒の英語学習活動の質の向上」について詳しく検討したい。

3.1.1 生徒の英語学習活動の質の向上

英語学習の仕方が上手な生徒は、英語力が容易に伸びていくので、ますます学習意欲が高まる。

一方、英語学習の仕方が下手な生徒は、長時間学習しているにもかかわらず、成果が上がらず、欲求不満を起し、やがては学習を放棄していく。それでは、上手な英語学習の仕方とは、



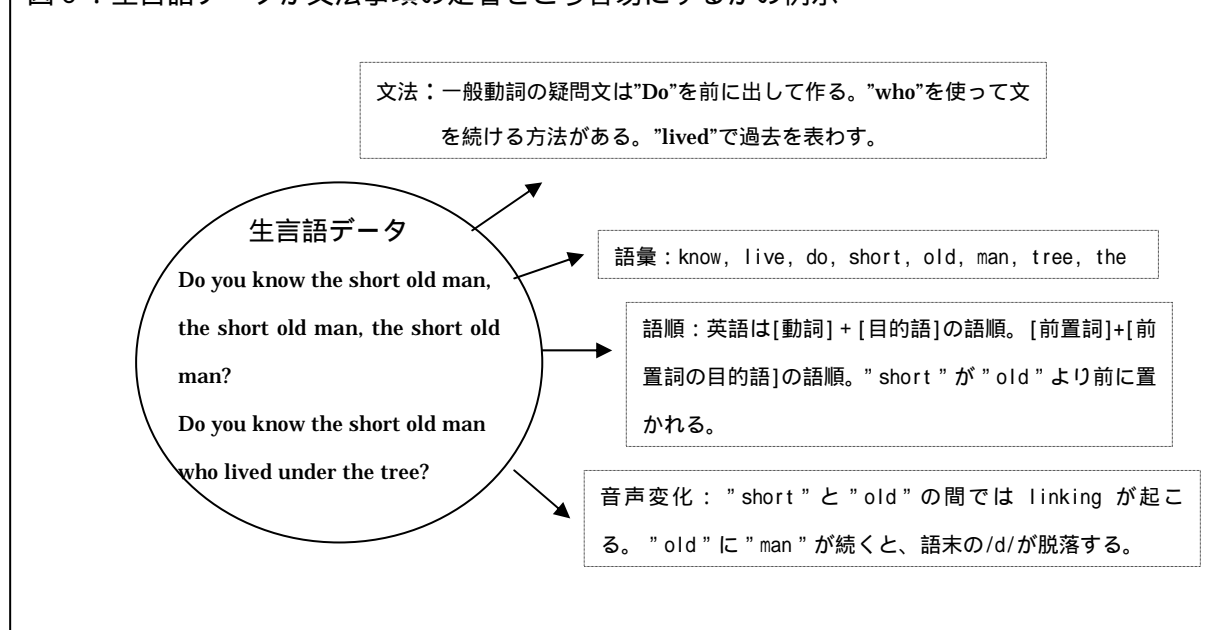
どのような仕方なのだろうか。

3.1.2 学習活動のマネジメント：生徒は英語の「練習」方法がわかっているか？

(1) 英語は「わかった」だけでは習得につながらない。英語は練習しなければ身に付かない。そ

の練習方法を入門期に教えることが肝心である。英語の練習で、筆者が最も効果的と考えるのは、「生言語データの蓄積」である。これは先述のように、筆者が知人の息子のAさんを教えた方法である。「生言語データ」とは筆者の造語であって、一般に認知された用語ではないが、「毎回の授業で教わる首尾一貫したtextを、意味を理解した上で完全暗写まで持っていき完全学習したもの」を言う。中学1年の4月当初からこれを継続し、生言語データが豊富な生徒は、教師の文法説明を聞いた時に容易に習得できる。なぜなら、その文法説明に合致する言語データが頭の中に豊富に蓄積されており、それと関連づけて文法事項が定着できるからである。反対に、このような生言語データの蓄積をしてこなかった生徒は、何回文法説明を聞いても、それと関連づけるための具体的な言語データが貧弱なために、文法が定着できないのである。

図6．生言語データが文法事項の定着をどう容易にするかの例示



上の図6は、内在化された英語の童謡の一節が、このような文法事項の定着と関連するかを示したものである。この童謡は、小学校1年生でも覚えられる易しい歌である。この歌に慣れ親しんできた生徒は、図の右側にあるような文法事項を学習した時には、新知識を頭の中の生言語データと関連付けられるために、学習が容易に定着する。

毎回の英語授業で習ったtextを、意味を理解した上で生言語データとして蓄積する練習の手順は、下記のとおりである。

- ・制限時間内朗読
- ・筆写（一瞥で語数を多くキープ）
- ・制限時間内訳し戻し
- ・制限時間内暗唱
- ・制限時間内暗写
- （更に発展させるなら）
- ・テープ倍速リスニング
- ・シャドウイング

これ以外にも、生言語データの質的・量的向上の実践としては、下記のものがある：

- (1) 生徒が自分の関心に応じて選択できる自学メニューの実践（田尻、1997）
- (2) 中嶋（三浦ほか、2002）の始業前ペア音読

3.2 英語で自分を人に伝え・人とわかり合いたいニーズに応える

生徒の英語授業への第二の要望は、自分を人に伝え、人とわかりあいたい欲求（本稿ではこれを交流欲求と呼ぶ）に応える英語授業である。近年、コミュニケーション活動は英語授業の中心に据えられるほど重視されてきているが、実は現状のコミュニケーション活動のすべてが生徒の交流欲求に応えられるわけではない。

例えば、下の例1の活動は、SHEET A を持った生徒と SHEET B を持った生徒がペアを組み、自分の SHEET に欠けている情報を得るために互いに質問するアクティビティーである。これは一見コミュニケーション活動に見えるが、実は本当の意味で何のコミュニケーションも生起させていない。Nancy や John や March などは、生徒自身に何の関係も価値も無い実体の無い記号にすぎない。このような活動をどれだけ繰り返しても、生徒同士が自己や相手と理解を促進することとはありえない。

例1．交流欲求に応えない「コミュニケーション活動」の例

| SHEET A | | | |
|----------|----------|----------|-------|
| Name | John | | Nancy |
| Birthday | March 23 | August 1 | |
| | | | |

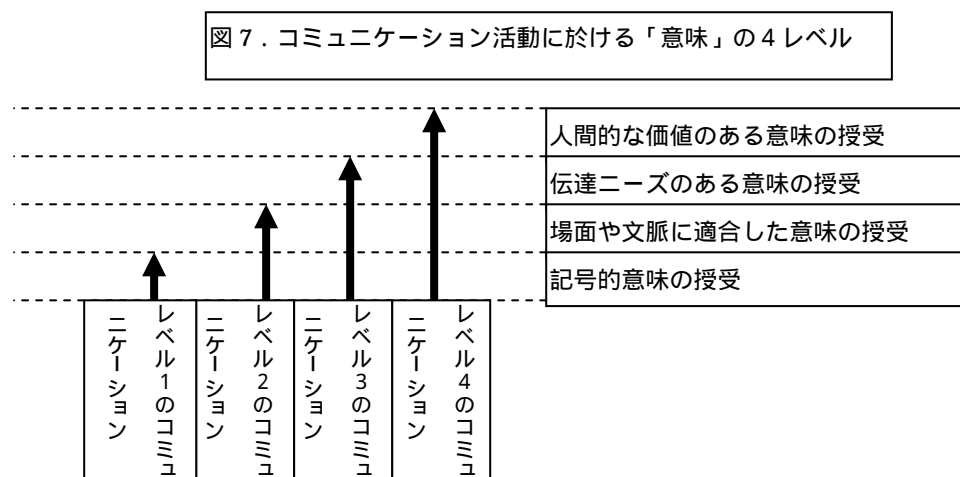
| SHEET B | | | |
|----------|------|----------|---------|
| Name | John | Bill | Nancy |
| Birthday | | August 1 | June 15 |
| | | | |

それでは、どのような活動が生徒の交流欲求に応え得るのだろうか。それに応えるためには、次項で述べる、コミュニケーションの「意味」における4つのレベルの理解が役に立つ。

3.2.1 コミュニケーション活動における「意味」の4レベル

英語コミュニケーション活動とは、授業に於いて生徒が他の生徒や教師との間で、意味を伝達

するために英語を使用する活動である。この際、伝達される意味には、図7のように4つのレベルが存在する。なお、これら4つのレベルは重層構造をなしており、上位レベルは下位レベルを包摂している。



レベル1のコミュニケーション＝記号的意味の授受：単なる字面の意味の伝達であり、事実との対応や伝達ニーズは考慮されていない。例えばパターン・プラクティスで生徒は、教師の prompt に合わせて “I like dogs.” “Cats” “I like cats.” “Cockroaches” “I like cockroaches.” と発話するであろうが、これは字面の意味だけを運んでおり、生徒が本当に犬、猫、ゴキブリが好きだという事実とは何の関係も無い。

レベル2のコミュニケーション＝場面や文脈に適合した意味の授受：事実と対応する意味の伝達だが、その意味は価値や伝達ニーズを伴うわけではない。例えば同じクラスの中で、“Who is your homeroom teacher?” と問う活動は、互いに自明のことをわざわざ聞いているわけであり、伝達する価値やニーズを伴わない。ディスプレイのためのコミュニケーション活動はこのレベルにとどまっている。

レベル3のコミュニケーション＝伝達ニーズのある意味の授受：発信者と受信者の間で、伝達するニーズの有る意味をやりとりすること。一方が知っている情報を、他方が知らないという情報のギャップが存在し、それを埋めようとする際に、伝達ニーズが生まれる。ただし、このレベルでは必ずしも当事者にとって価値ある意味を扱うとは限らない。例えば地図を用いたギャップ活動で、生徒が「こんな行く予定もない人工的な街の地図を完成させることに何の意味があるのか？」と疑念を抱けば、活動は無意味である。前頁の例1もこれにあたる。

レベル4のコミュニケーション＝人間的な価値のある意味の授受：発信者と受信者の間で、自分や相手にとって価値ある意味を持った伝達を行うこと。マズローの欲求階層の各レベルの充足につながる事柄や、自己受容、自己防衛、自己向上、他者理解、人間関係作り、啓示的価値、芸術的価値などを含む意味のレベルが伝達される。

以上、レベル1～3までの活動は、慣れを生むための擬似コミュニケーション活動として役に立つもので、その存在意義を否定はしないが、英語授業のコミュニケーション活動がこのレベルで終わってしまってはならない。仕上げ段階ではレベル4の人間的価値のある意味の伝授まで高

め、生徒の交流欲求を満たすべきである。

3.2.2 レベル4（人間的な価値のある意味の授受）の活動とは

こうしたレベル4のコミュニケーション活動の具体例は、中嶋(2000)、JACET オーラルコミュニケーション研究会(2002)、松畑(2002)、菅ほか(2002)、三浦ほか(2002)などに詳しく紹介されているので参照されたい。生徒の交流欲求に英語授業が適切に応えることの必要を、金森(2003)は小学校英語活動を論じる中で次のように強調している：

小学校における「国際理解教育の一環としての英語会話」の「国際知識」では、外国語、外国文化のスキルや知識の獲得だけではなく、コミュニケーション能力を育てるための活動をとおして、「自尊心」を育て、同時に「他者尊重」の心を育むことも大切である。そのための英語活動とは、英語を媒体とした「楽しい」コミュニケーション活動であり、人と触れ合う体験を持つことであり、自己表現の機会を持つことである。(金森：2003：12)

英語で自分を人に伝え、人とわかりあう活動のある授業では、教室の関係が次のように向上する：

- (1) 教師にとって生徒は単なる教授対象や被験者ではなく、教師が学ぶべき相手となる。
- (2) 教室に一元的価値ではなく、多元的価値が認められるようになる。こうした多元的価値肯定の中で、すべての生徒がユニークな個人として光り輝くチャンスがある。40人のクラスには41の人生と希望とアイデアが交流される。

多元的価値観の例

form (文法的正確さの出来)

content (内容的豊かさの出来)

presentation (発表の素晴らしさ・呈示の工夫の出来)

volume (分量の多さの出来)

artistic quality (芸術性)

individuality/ uniqueness (個性・独創性)

みんなそれぞれ
得意があって、そ
れで互いに貢献
できる。

3.3 不安や恐怖なく、安心して楽しく授業を受けたいニーズに応える

生徒の英語授業に対する3大欲求の最後の1つは、「身体的・精神的安全が守られる授業」そして「楽しい授業」である。

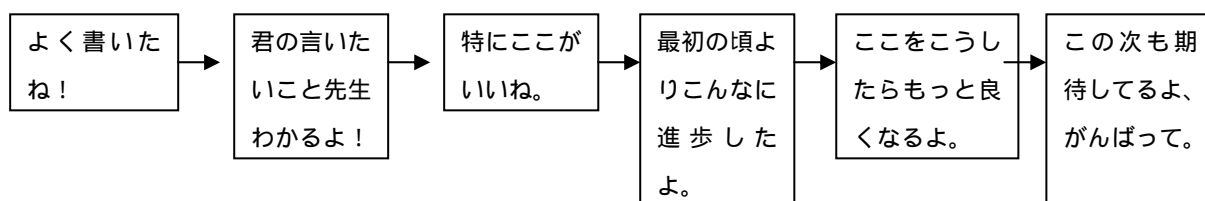
授業で、生徒の身体的・精神的安全をおびやかすものとしては、教師、授業方法、同級生による次のような行為が考えられる。

教師：体罰、セクハラ、言葉による暴力(特に生徒の存在価値を否定する発言)、ネグレクト(無視する、与えるべき世話を与えない)、えこひいき、その日の気分によって生徒に接する態度が激変する傾向、生徒の授業批判などに対する報復的言動など

授業方法：規律に欠けた授業、一部の生徒だけのための授業、落ちこぼしを生む授業、不当なテスト出題や不公平な採点・評価、過度の宿題など

同級生：他の生徒の発言に対する妨害、他の生徒に対するひやかし、特定の生徒を仲間はずれにする行為、授業中や試験中の不正行為、カンニングさせたりレポートを代筆させるなどの不正の強要など

これらのうち、教師の否定的叱り方と、ボスの生徒による他の生徒の発言妨害、落ちこぼしを生む授業運営については、既に「2.4.2 学習心理学から見た生徒の学習動機」で言及したので、ここでは繰り返さない。ここでは、生徒の安全欲求に応える教師の指導言のあり方について述べておきたい。それは、生徒の自由英作文へのコメントを例にとってフローチャートで書けば、次のような指導言である：



最後に

以上、英語授業を貫く幹の原則を、どのような学習ニーズを想定して、どのような授業目的を掲げ、どのような指導原則を用いるか、の3点で考察してきた。具体的にどのような学習ニーズを想定するか、どのような目的を追うか、どのような指導原則を採るか、は個々の教師に任されるべきであろう。英語教育をライフワークとしようとしている教師には、それだけの選択が認められるべきである。40年近くにわたる教師人生で、自分は英語教育を通じて何の実現を目指そうというのか、そう問うた時、自分の英語授業を貫く幹の存在に気づくであろう。

同じ学校の英語科で教えていても、一人一人の教師の描く英語授業の幹は、それぞれに異なることだろう。そういう時には、同僚教師に自分と同じ幹を持つことを要求するのではなく、むしろ多様な幹があることの advantage を伸ばせばよい。そして、自分と同じ幹を追う仲間、研究会等を通じて全国に捜し求めればよい。友あり、遠方より来る、また楽しからずや、である。

引用文献

太田佐知子(1988)「興味の持続を図ることで学力向上を目指す英語教育」『これからの英語教育』三省堂

菅 正隆(1994)『生き生き授業 オーラルコミュニケーション』三友社出版

菅 正隆・北原延晃・久保野雅史・田尻悟郎・中嶋陽一・蒔田守(2002)『6 Way Street』有限会社バンブルビー

佐野正之(編著)(2000)『アクション・リサーチのすすめ 新しい英語授業研究』大修館

田尻悟郎(1997)『生徒がぐーんと伸びる 英語科自学のシステムマニュアル』明治図書

中央教育審議会(1999)「初等中等学校と高等教育の接続の改善について(答申)」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/991201.htm

中嶋洋一(2000)『学習集団をエンパワーする30の技』明治図書

松畑熙一(2002)『英語教育人間学の展開 - 英語教育と国際理解教育の接点を求めて』開隆堂

『The Promising Age 棚橋克彌先生静岡大学退職記念論文集』静大教育学部英語研究会会誌平成17年4月発行

三浦 孝 (1991) 「授業の「荒れ」にどう対処するか」『現代英語教育』10月号 研究社

三浦・弘山・中嶋 (2002) 『だから英語は教育なんだ』 研究社

村野井・千葉・畑中 (2001) 『実践的英語科教育法』成美堂

若林繁太 (1996) 『教育は死なず』旬報社

Ausubel, D. (1968) *Educational psychology: a cognitive view*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

Brown, H. D. (2000) *Principles of language learning and teaching, fourth edition*. Addison Wesley Longman.

Burns, A. (1999) *Collaborative action research for English teachers*. Cambridge: CUP.

JACET オーラルコミュニケーション研究会 (2002) 『オーラル・コミュニケーションの理論と実践』 三修社

Maslow, A. (1954) *Motivation and personality, second edition*. New York: Harper & Row.